（別添）

令和５年度「ちばっ子の学び変革」推進事業（「学力・学習状況」検証事業）研究状況報告書

木更津市立木更津第一中学校

１　学校紹介

本校の学区は、木更津駅を中心にして県木更津袖ケ浦線（一般県道２７０号）までの駅東部商店街、西側の海岸線までの本町商店街、南部は矢那川、北部は中里までの住宅街が学区である。

昭和４５年頃から５５年にかけて、学区外に清見台団地、シーアイタウン、八幡台団地などが次々に造成された。それに伴って、ドーナツ化現象を呈したため昭和５６年度に学区の再編成が行われ、朝日２、３丁目、長須賀が学区に編入された。それまでの学区は木更津第一小学校のみであったが、この再編成により西清小学校が加わり、現在２校の小学校から本校に入学している。

保護者の学校教育に関する関心は高く、学校安全ボランティアなど学校教育活動に対しても協力的である。一方、家庭状況の変化、地域住民の連帯意識の変化などにより、ＰＴＡ活動や地域活動の運営にも工夫が必要になってきている。

２　研究主題

自己の考えを深め、表現できる生徒の育成 ～工夫した学級集団づくりや授業づくりを通して～

３　研究の概要

（１）児童生徒の実態と課題

令和５年度、国語の調査結果にみられる特徴と現状

国語については、領域・問題形式ともにすべての分野で県・全国の数値を下回る結果となった。領域の中では、読む領域が一番低い結果となり、読解力に課題があることがわかった。また、書く領域も県・全国の平均正答率よりも低い結果となった。特に、「文章を読んで理解したことを知識や経験と結びつけ、自分の考えとして表現すること」に課題があることがわかった。

令和５年度、数学の調査結果にみられる特徴と現状

数学については、「数と式」「データの活用」の領域で県平均を上回る結果となった。特に「累積度数の意味の理解」に関しては、県・全国よりも平均正答率が高い結果となった。

しかし、図形の領域に関しては、県・全国の平均正答率よりも低い結果となってしまった。特に、「条件を読みとり、証明する問題」に課題があることがわかった。

令和５年度、英語の調査結果にみられる特徴と現状

英語については、領域・問題形式ともにすべての分野で県・全国の数値を下回る結果となった。特に「書くこと」の領域では、平均正答率が大変低い結果となってしまった。その中でも、「日常的な話題について、事実や自分の考えなどを整理し、まとまりのある文章を書く問題」では、正答率、無解答率が低くなってしまった。英文を書くための英単語や文法の知識が不足していることが、結果からわかった。

（２）学力向上のための取組

【全体での取組】

・全国学力・学習状況調査の結果分析

→全国学力・学習状況調査の結果を全教科で分析し、課題把握を行い、課題解決策（表現力の向上）について検討をおこなった。

・「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラムの活用

→「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラムの指導過程に沿った授業実践を全教科で実践している。特に「まとめあげる」の過程については、生徒が自分の言葉で書けるよう、取り組んでいる。

・ＩＣＴ機器の活用

→お互いの意見を共有し、意見交換をスムーズに行うためにタブレットを活用している。また、発表をする時に、視覚的にも伝えやすくするために、スライドショー等の活用を行っている。

【国語科】

・全学年で作文指導の実施

→２００字程度の作文（テーマを決めた意見文など）を月に１～２枚のペースで取り組ませ、指導者による添削や、生徒間での相互評価の機会を設けている。最初は書き方がわからなかったり、書くのに時間がかかったりする生徒もいたが、練習を重ねるにつれて、少しずつ書ける生徒の数は増えてきている。

・「漢字練習」の時間の確保

→授業冒頭の５分間を自主学習の時間として位置付け、生徒は自分のペースで学習に取り組めるようにしている。

・実践モデルプログラムの「広げ深める」過程の充実

→学習課題に沿って、生徒一人ひとりが解決を図ったり、教師が道筋を示したりするだけでなく、自分の考えを仲間へと伝えたり、仲間の発表から新たな考えに気づいたりする機会を設けることで、表現力が磨かれるように指導している。

・ＩＣＴ機器の効果的活用

→自分の考えを持ち、他者の意見を取り入れることができるように、意図的にＩＣＴ機器の使用場面を設定し「書く力」「表現力」の向上を図っている。

・朝読書の時間を活用

→図書委員が中心となって本の読み聞かせを行っている。この取組を通して本の内容をより深く理解し、読書を楽しむことにつながっている。

【数学科】

・１人１台端末の活用

→「説明する力」を向上させるために、１人１台タブレットで「問題解決動画」を作る授業実践を行っている。

・個に応じた指導の実施

→数学科の授業では少人数指導加配教員と共に、きめ細やかな指導を行うことで個に合った指導を行っている。「できた・わかった」の積み重ねで、数学への学習意欲を高めさせている。

・委員会活動を通しての基礎学力向上
→学芸委員会の取組である学習コンクールの取組（計算）を通して、基礎的な学力を定着させている。

【英語科】
・基礎・基本の定着
→基礎・基本を英単語、英文法ととらえ、反復練習や小テストを通して定着を図っていく。
・リテリング（再話）指導の実施
→中学３年生になった時に、文章の再構成と言われる「リテリング」ができるように、１年次から学年に応じた表現力向上の手立てを講じていく。
・１人１台端末の活用
→発表やペア、グループでのやりとりが視覚的にもわかりやすくするため、スライドショーなどを取り入れている。また、学級の仲間の意見などを共有しやすくするためにも、タブレットの活用を行っている。

（３）加配教員（学習サポーターを含む）の活用
【成果】
国語科では、学習サポーターが書く活動を中心に個別指導を行った。１学年で「根拠を明確にして意見文を書く」実践を、２学年で「校歌の内容を知識や経験と結び付けて短歌を創作する」実践を行った。その時に、自分の考えを書くことが苦手な生徒に寄り添い、個別に指導を行った。また、書く活動をする時に、タブレットで書くか、手書きで書くかの選択制にした。手書きで書く生徒には、学習サポーターがつき、個別に指導を行った。普段は書くことを苦手としている生徒も、課題を終わらせることができ、表現活動につなげることができた。
数学科では、基礎学力が定着していない生徒に個別指導をすることで、簡単な計算問題を自力で解くことができるようになった。また、生徒同士でわからない箇所を質問し合い、問題を解く中で、課題解決能力も高めることができた。
教師一人では、対応することができないことも、学習サポーターがいることで指導が可能となった。
【課題】
・学習サポーターの勤務日と授業の学習内容が合致せず、うまく活用できないことがあった。
・Ｔ２としての役割が多くなってしまった。より良い活用方法について模索していく必要がある。

４　成果
全職員で生徒の学習課題について共通理解を図り、手立てを共有することで、全教科で表現力を高めるための授業改善をしようとする意識改革をすることができた。また、「『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」を全教科で活用することで、表現力を高めるための学習過程を踏まえた授業改善につなげることができた。授業改善をする過程で、教科部会内での意見交換や職員同士の相互授業参観が活発にできたことも大きな成果だと考える。
また、生徒も自分の考えを書く、発表するなどの表現する場面が増えたことで、以前よりも臆せずに自分の考えを書き、級友に伝えることができるようになってきている。数値的な変容は見られないが、継続していくことで数値にも変化が見られていくと考える。

５　今後の課題

１０月３０日（月）に「ちばっ子の学び変革推進事業」の中間検証として、県教育委員会指導主事の先生方、木更津市教育委員会の先生が来校され、本校の国語科の授業を参観された。その後の協議会では、様々な視点からの助言をいただいた。１学年では「根拠を明確にして意見文を書く」実践を、２学年では「校歌の内容を知識や経験と結び付けて短歌を創作する」実践を行った。事後検討会では、「生徒に身に付けさせる力を焦点化すること」「活動前の説明と指示をできるだけシンプルにすること」「学習課題の提示からまとめまでの流れを明示する」ことなどについて、様々な角度からご講評をいただいた。

特に、１・２学年で共通していた改善のポイントは、学習指導案の中の「『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」にある「広げ深める」過程において、交流活動を効果的に行うということである。学習課題に沿って、生徒一人一人が解決を図ったり、教師が道筋を示したりすることももちろん大切である。しかし、自分の考えを仲間へと伝えたり、仲間の発表から新たな考えに気づいたりする機会を設けることで、表現力は磨かれていく。中間検証の授業では、こうした交流の機会がなかったため、今後は「広げ深める」過程を意図的に設けていきたいと考えている。

検討会でいただいた授業改善のヒントについては、職員全体でも共有を図り、今後の授業実践に活用していきたい。

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に関する課題としては、「生徒が主体的に課題に取り組み、そこから疑問をもち、解決策を考える」という指導の手立てに難しさを感じている。本校の職員の中でもすばらしい授業実践をしている職員がいる。相互授業参観を計画的に組み込み、全職員で授業改善ができるように取り組んでいきたい。

今後も校内研修や要請訪問を活用しながら、国語科を中心に全教科で指導法や手立てについて考え、取り組んでいきたい。